

『はじめての渋沢栄一：  
探究の道しるべ』

渋沢研究会編（ミネルヴァ書房 2020）

本書の請求記号 289.1 ⅡHaji

稲垣宏行

2021年、初の大河ドラマの主人公になった渋沢栄一。3年後には新一万円札の顔になると言われていますが、「日本資本主義の父」と呼ばれる彼はどのような人物だったのでしょうか。

本書は渋沢栄一を研究する19人の執筆者が手がけています。第Ⅰ部が「一般読者のための渋沢栄一ガイド」、第Ⅱ部が「大学生・外国人学生のための渋沢栄一ガイド」、第Ⅲ部が「学校現場での渋沢栄一ガイド」に大別され、さらに歴史小説や自伝、政治・外交や社会福祉、地域社会など、多彩な視点からの描写がなされています。

渋沢の生涯には、幼少期から親しんできた『論語』が大きく関わっています。彼は『論語』の教義と算盤（経済活動）を一体化させた「道徳経済合一説」を思想的支柱にしていたと言われていいます。「実業家は公益を追及して行うべきで、私利私欲を追及するだけでは競争は激化し、弱肉強食の世界となる。道徳と経済の一致は競争を「平熱」に保ち、健全な資本主義社会を維持する」として、公益の追求を第一に置いています。渋沢は、社会全般を富ませることで個人も富むと考えていたのです。

1873（明治6）年に大蔵省を辞した渋沢は、東京駅の建設や第一国立銀行の創設、株式会社制度の確立など様々な事業に携わりました。晩年は東京上野の養育院運営や国際連盟協会の活動にも取り組みました。

渋沢の思想の根底には、彼が生きた徳川時代の身分制度「士農工商」の存在がありました。そこに内包された賤商意識が、明治期日本の工業化や欧米列強の植民地化への対抗の妨げになるという危機感がありました。また、彼は商工業の発展のためには、その前提となる商人のモラル向上が必要であり、広く社会全体の改善に努めるべきとも考えていました。東京商法会議所（現・東京商工会議所）や官立の公共高等商業学校（現・一橋大学）設立もその一環です。

一方で、渋沢は女子教育の支援も行っていました。後に近代化遺産に指定される富岡製糸場の操業に当たり、女工の人員確保にも尽力したといえます。先月号で評者は、雑誌で彼が「婦人は政治に向かない」という発言をしていた事例を挙げました。それも事実には違いありません。しかし、飽くまで一面に過ぎないとも考えています。

本書は、渋沢を題材にした道徳教育やグループ学習、社会見学の事例も挙げています。また「郷土の偉人を知る」ことによって、偉人を生み出した風土や郷土の歴史、地域社会の中で活躍した知られざる人々にも焦点が当たり、地域社会についての理解を広げていくことになるのではないかと指摘します。

渋沢栄一の孫の敬三も、祖父に劣らぬ注目すべき人物です。彼は当初、生物学者を志向していましたが、父の篤二が廃嫡され祖父の強い要望で嫡子に据えられたことから、銀行家への道を余儀なくされました。恐慌の影響でマルクス経済学が隆盛し、資本家階級たる自分の立場に肩身の狭い思いを抱えていました。太平洋戦争敗戦後は戦勝国から公職追放に処されました。しかし、そんな逆境下でも民俗学者の柳田国男との出会いなどを経て自らの夢や思想を確立し、現在広く普及している「民具」という造語を造りました。日本の「過去の歴史的記録労作」の「殆ど全てが自慢史ばかり」であり、「次に続く者をして、その誤りを二度と繰り返させない用意」とする意図で造った「失敗史」も、「真の成功は失敗を素直かつ科学的に究明した上に築かれるべきものであろう」という敬三の信念から生まれたものだと本書は述べています。

日本も様々な社会的問題を抱えています。渋沢栄一と敬三はそんな今の日本が見えているかのように、本書を通して忠言しているかのように感じられます。

いながき ひろゆき（司書・管理運営課）